

研究紀要

縄文の森から

From JOMON NO MORI

創刊号

鹿児島県のナイフ形石器文化後半期の研究
桑波田 武志

遺跡と道跡 —南九州の縄文時代早期を主として—
繁昌 正幸

縄文時代早期の磨製石鎌について
宮田 栄二

南九州貝殻文系土器の組合せに関する覚え書き
黒川 忠広

石板式土器再考
前迫 亮一

縄文時代早期の壺形土器出現の意義
新東 晃一

上野原遺跡第10地点検出の「環状遺棄遺構」について
八木澤 一郎

石庖丁の使用痕分析
永瀆 功治

波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論
東 和幸

中世山城跡の近世遺物
堂込 秀人

埋蔵文化財情報管理システムの概要と情報公開
高見 憲次

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2003. 3

創刊にあたって

平成4年に開所した鹿児島県立埋蔵文化財センターは、10年を経た平成14年4月、「上野原縄文の森」内に新設移転しました。

北に霧島連山、南に桜島を望む台地上に復元された「上野原縄文の森」は、国指定史跡である上野原遺跡を中心に、当センターのほか、上野原遺跡の出土品や鹿児島県内の考古資料を紹介する「展示館」、さまざまな古代体験にチャレンジできる「体験学習館」などが整備され、“縄文の世界と向き合い、ふれあい、学び、親しむ場”として、オープン以来多くの見学者でにぎわっています。

この「上野原縄文の森」の中核施設である当センターから、このたび、念願の研究紀要が発刊されることとなりました。その名も『縄文の森から』……。鹿児島県の考古・歴史・埋蔵文化財等に関する情報を発信する新たな媒体の誕生です。先人の確かな歩みを今日に活かし、そして未来へ繋いでいく場として充実させて参りたいと存じます。

刊行にあたっては、多くの方々から御支援・御協力をいただきました。心より感謝申し上げますとともに、内容、その他について忌憚のない御意見・御批判をお寄せくださるようお願い申し上げまして、創刊にあたってのあいさつといたします。

平成15年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井 上 明 文

『縄文の森から』創刊号 目次

鹿児島県のナイフ形石器文化後半期の研究	桑波田 武志 ----- 1
遺跡と道跡	
－南九州の縄文時代早期を主として－	繁昌 正幸 ----- 17
縄文時代早期の磨製石鏃について	宮田 栄二 ----- 29
南九州貝殻文系土器の組合せに関する覚え書き	黒川 忠広 ----- 37
石坂式土器再考	前迫 亮一 ----- 43
縄文時代早期の壺形土器出現の意義	新東 晃一 ----- 51
上野原遺跡第 10 地点検出の「環状遺棄遺構」について	八木澤 一郎 ----- 61
石庖丁の使用痕分析	永瀆 功治 ----- 73
波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論	東 和幸 ----- 81
中世山城跡の近世遺物	堂込 秀人 ----- 89
埋蔵文化財情報管理システムの概要と情報公開	高見 憲次 ----- 101

縄文時代早期の壺形土器出現の意義

新 東 晃 一

The Significance on the Appearance of Jar-shaped Potteries in Jomon Earliest Period

Shinto Koichi

要旨

縄文土器は、煮沸を用途とした深鉢形の器形が中心であり、台付皿や壺などの出現は縄文時代後期以降とされてきた。ところが最近、南九州地域の縄文時代早期後半頃に深鉢形土器に伴って壺形土器が使用されていることが判明している。さらに、壺形土器は上野原遺跡のように埋納或は埋設されて発見されるという特異な出土状態がみられるものが存在してきた。このような南九州地域での壺形土器の出現と埋納壺及び埋設壺の存在は、南九州地域の縄文時代早期の社会的背景を探る重要な資料になることが考えられる。

ここでは、縄文時代早期の南九州地域の壺形土器の機能や用途と埋納壺及び埋設壺の意義について検討を行った。

キーワード：壺形土器，埋納壺，埋設壺，祭祀

1 はじめに

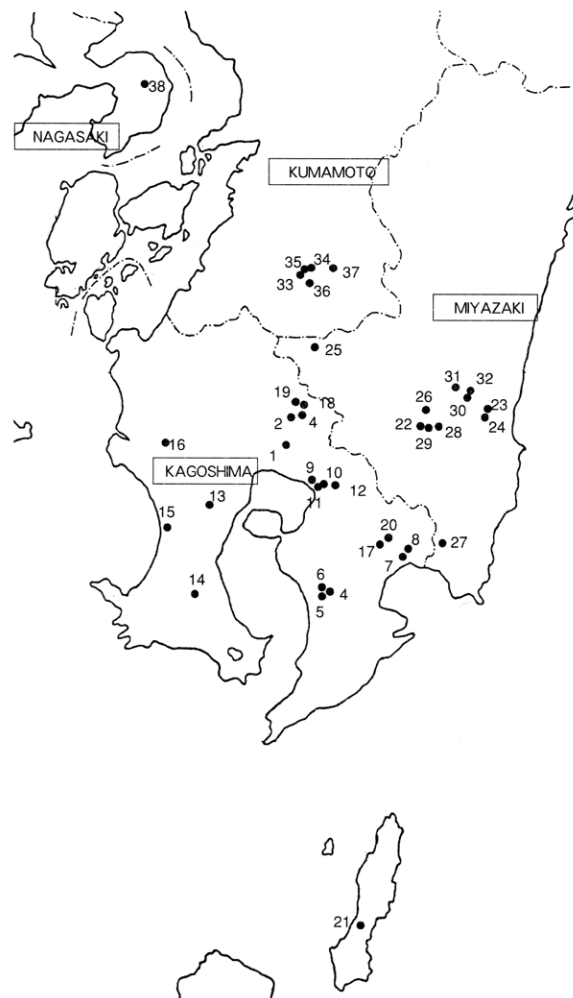
鹿児島県横川町中尾田遺跡の発掘調査で、筆者は縄文時代早期の壺形土器に最初に接する機会を得たが、それまで縄文時代早期には壺形土器の出土例がないことから当時は「壺の形状をした土器」として取り扱わざるをえない状況にあった（鹿児島県教委 1981）。

その後、この壺の形状をした土器は、熊本県球磨郡山江村高城遺跡（熊本県教委 1988）や同村城・馬場遺跡（熊本県教委 1990）などで比較的多量に出土し、壺形土器が縄文時代早期後半の手向山式土器に伴って存在することが判明した。そして、相次いで出土した熊本県人吉盆地内の資料をいち早く検討した「手向山式土器の壺について」の論考が松舟博満氏によって発表された（松舟 1990）。

それ以後、壺形土器は、鹿児島県鹿屋市前畑遺跡（鹿児島県教委 1990）や同県日置郡吹上町塚ノ越遺跡（吹上町教委 1990）などにおいては後続する平椀式土器や椀ノ原式土器¹⁾にもみられ、南九州では縄文時代早期後半の土器型式の深鉢形土器にセットとして継続的に存在していることが判明してきた。

そこで1991年、南九州の縄文時代早期に壺形土器が存在するという特異性に注目し、従来の南九州の縄文観の見直しを迫る事例の一つとして壺形土器の集成を試みた（新東 1991）。

そして、1994年、鹿児島県国分市上野原遺跡の調査において一對の完形の壺形土器を含め、11基12個が埋納或は埋設²⁾されて発見されたが、これは縄文時代早期の壺形土器の存在の意義を考える上で新たな展開を提供することとなった。つまり、上野原遺跡例は、明らかに埋納或は埋設された状態であり、しかも完全な壺形土器が埋納或は埋設



第1図 壺形土器の出土分布図

された出土状態であったからである（鹿県埋セ2000）。

その後、同様な埋納或は埋設された壺形土器が、同県福山町城ヶ尾遺跡や熊本県深田村灰塚遺跡等からも発見されてきた。さらには、宮崎県野尻町漆野原遺跡などでは全く損傷のない完形の壺形土器も発見されており、これらも埋納或は埋設された壺の可能性を伺わせるものであることにも注目した。

今回、これまで壺形土器の出土した遺跡の中から埋納或は埋設された状態で出土した3遺跡を中心に、壺形土器の機能や用途について言及し、南九州縄文時代早期の社会的背景について検討してみたい。なお、壺形土器については、その系譜や器形の変遷など多くの細かな問題点も所在するが、これらについては稿をあらためて言及したい。

2 壺形土器の出土遺跡と分布範囲

壺形土器の出土遺跡は、1991年の集成時では11遺跡であったが、今回の集成では38遺跡を数え、わずか10余年の間に大幅に増加している。

これらの分布域は、鹿児島県（21遺跡）を中心に熊本県南部（5遺跡）から宮崎県南部（11遺跡）を含んだいわゆる南九州と、長崎県（1遺跡）がある。圧倒的に鹿児島県が多いが、南九州縁辺部の長崎県でも同系統の壺形土器が出土しており、今後、北部九州や宮崎県北部から東九州への拡がりも充分考えられる。

（1）鹿児島県の出土例

鹿児島県の壺形土器の分布は、県本土の手向山式土器や平椀式土器、塞ノ神式土器の出土遺跡のほぼ全域に分布する。注目すべきは、熊毛諸島の種子島にも存在し、分布圏が離島へも広がることである。

中尾田遺跡では、早期の手向山式土器を中心に10類25細別の土器群が出土しているが、そのうち手向山式土器は第9類に該当する。

壺形土器は第8類に分類したもので、第9類の手向山式土器とは区分している。それは、網目燃糸文を施文する土器群のなかの壺形を呈するものを第8類とし、手向山式土器の器形を呈するものを第9類として区分したためである。つまり報告書の当時の見解では「第8類土器は、壺型の器形を呈する特徴的な形態をもつものである。ほぼ1個体の出土であって、これまで類例は知られていないものであり、非常に個性的な土器といえる。」として、手向山式土器の文様は所持するものの、形態上、手向山式土器とは区分して類別した。器形は、頸部で締め、口縁部は外反する。なお、この壺形土器の同一個体片は、ほぼ20×30mの広い範囲に約20点出土している（鹿県教委1981）。

塚ノ越遺跡では、トレンチ調査（確認調査）の32トレンチで前平式土器や吉田式土器などの早期前葉の土器も若干混在するが、そのほとんどは早期終末の椀ノ原式土器（塞ノ神A式土器）が出土している。その中に、該当の壺形

鹿児島県壺形土器出土地名表

	遺跡名	所在地	文献
1	石峰	始良郡溝辺町麓	1
2	中尾田	始良郡横川町中ノ	2
3	星塚	始良郡横川町下ノ	3
4	前畑	鹿屋市郷之原町前畑	4
5	飯盛ヶ丘	鹿屋市郷之原町飯盛ヶ丘	5
6	榎崎B	鹿屋市上野町榎崎	6
7	別府（石踊）	曾於郡志布志町安楽	7
8	下田	曾於郡志布志町帖	8
9	平椀	国分市上井	9
10	上野原2・3	国分市川内	12
11	上野原10	国分市川内	10・11
12	城ヶ尾	始良郡福山町佳例川	13
13	横井・竹ノ山	鹿児島市犬迫町横井・竹ノ山	14
14	石坂上	川辺郡知覧町永里	15
15	塚ノ越	日置郡吹上町入来	16
16	小市原	薩摩郡種脇町塔之原	17
17	出水平	曾於郡大隅町月野	18
18	七ツ谷	始良郡吉松町永山	19
19	石打	始良郡吉松町永山	19
20	香ノ田	曾於郡松山町新橋	20
21	須行園	熊毛郡中種子町野間	21

宮崎県壺形土器出土地名表

	遺跡名	所在地	文献
22	天神河内第2	宮崎郡田野町天神河内	22
23	白ヶ野第3	宮崎市大字船引	23・24
24	杉木原	宮崎郡清武町大字今泉	25
25	妙見	えびの市大字東川北	26
26	下藪	都城市荒ヶ田下藪	27・28
27	開尾	串間市大字奈留	29
28	札ノ元	宮崎郡田野町甲前平	30
29	元野河内	宮崎郡田野町甲元野	31
30	東城原第2	西諸県郡野尻町紙屋	32
31	橋山第1	西諸県郡高岡町橋山	33
32	漆野原	西諸県郡野尻町紙屋	34

熊本県壺形土器出土地名表

	遺跡名	所在地	文献
33	合戦ノ峰	球磨郡山江村山田	35
34	高城	球磨郡山江村山田	35
35	城・馬場	球磨郡山江村山田	36
36	天道ヶ尾	人吉市七地町天道ヶ尾	37
37	灰塚	球磨郡深田村字灰塚	38

長崎県壺形土器出土地名表

	遺跡名	所在地	文献
38	百花台	南高来郡国見町百花台	39

土器が出土している。

壺形土器は、口縁部破片のみの出土で個体数は少ないが、口縁部の形態からa～dの4つに分けられている。a類の口縁部は、胴・肩部から内傾したままでおさめる器形で、口唇部は若干外反して拡張した傾向がみられる。口唇部外端には刻目を施し、それ以下の口縁部～肩部には刻目を有する微隆起突帯文を、数条を単位として螺旋状に巡らせている。胴部下半の文様は、明らかでない。b類は、同様に内傾する口縁部であるが、口縁端部は意識して外反するものである。しかし、器形状はa類とほぼ同じである。口縁外

面には、数条の沈線文(凹線文)を一単位として巡らせるものである。c類は、口縁部を内傾したままで口唇部は丸みをもっておさめ、口唇部には斜位の刻目を施すものである。d類は、口縁部の端部を外方に拡張し、広い平坦な口唇部をつくる。その平坦な口唇部には、へら描きの曲線文を描くものもある(吹上町教委1990)。

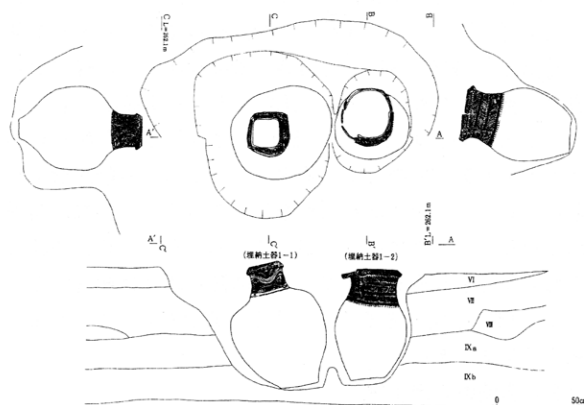
前畑遺跡では、縄文時代早期の数個体の石坂式土器と柵ノ原式土器を除けばほとんどは平栴式土器である。平栴式土器の中に、有文と無文の壺形土器が存在する。

有文の壺形土器は、口縁部は内傾し、口縁部の上端に粘土帯を貼付して蒲鉾状に肥厚させ、さらにすぼまった形を呈する。器形はほぼ類似するが、文様の組み合わせが若干異なる。口縁部の肥厚帯に横位あるいは弧状の凹線文を数条巡らせ、その上下端に刻目を施す。肥厚帯の下は斜位の数条の凹線文を鋸歯状に交互に施文し、凹線文の交点には刺突文を施すものや、刺突文を施した突帯文を縦位に貼付しているもある。口縁部の外面に平栴式土器特有の結節縄文が施文されるものもある。肥厚帯を若干口縁部の側面に輪積み貼付する手法であり、肥厚部分とその下位には縄文を施文する。無文の壺形土器も存在し注目された(鹿県教委1990)。

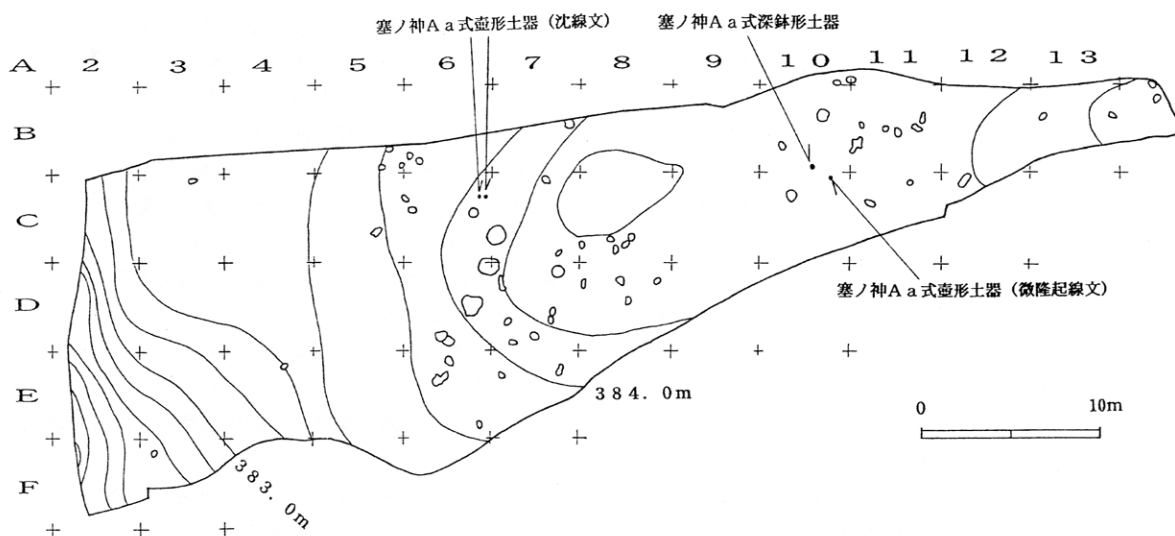
別府(石踊)遺跡は1979年に報告された遺跡で、最も早い段階に壺形土器が発見された遺跡である。もちろん、壺形土器という呼称はみられないが、報告書は「一略一文様は小さな刻みを施す細隆起突帯をめぐらすものである。Ⅵ類土器は今までに型式名のついていないものであるが、この種の土器は塞ノ神式土器、平栴式土器等に伴って出土している。一略一 今後の研究によりこれらの土器については時期、型式設定の必要があると思われる。」と記載し、新型式であることを示唆している(志布志町教委1979)。

石坂上遺跡は、河口貞徳によって1989年に「形式不明の土器」の一つとして発表されたものである。報告によると「石坂上遺跡第3層出土の土器である。石坂式と同時期でかなり古い時期のものといえる。内傾する器形で、篋刻みした微隆帯を密接して廻らすものである。塞ノ神式土器・平栴式土器に微隆帯をもつものがみられるが、器形が異なっている。今のところまったく系統不明の土器である」と記載されている。その後、塚ノ越遺跡からこれと同類の口縁部形態が出土し、柵ノ原式(塞ノ神Aa式)土器の壺形土器に該当することが判明したものである(河口1989)。

上野原遺跡では、天道ヶ尾式土器から平栴式土器の早期後葉の前中期(報告者は4段階に細分)の土器型式に多量の壺形土器が伴出している。その中に、11基12個(壺形土器は11個)の土器の埋納遺構が発見されている。そして、天道ヶ尾式土器期の埋納土器が5個、平栴A・B式土器期が4個、平栴C式土器期が3個と3時期に区分して報告さ



第2図 上野原遺跡の壺形土器出土状態
〔原図=鹿県教委2000より〕



第3図 城ヶ尾遺跡の壺形土器出土配置〔原図=児玉1998より〕

れている。そのうち、3基4個体については土器の埋められていた土坑が確認されたが、残りの8個体については土器がほぼ完全な形か、もしくは押しつぶされた形で検出されている。

調査担当者が特に注目する点は、11個体の土器にススの付着が認められること、土坑の掘り方が土器より一回り大きく土器を埋納するだけの大きさであること、12基の土器埋納遺構は調査区全体の標高が最も高い場所の一角に所在することである。この点は埋納土器の意義を考察する上では重要な視点である（鹿県埋セ2000）。

城ヶ尾遺跡では、柁ノ原式土器（塞ノ神A a式土器）の深鉢形土器1個と壺形土器3個の完形土器がそれぞれ単独で土坑内から出土している（児玉1998）。いずれも口縁部を上にして直立した状態で埋められていることが確認されている。本遺跡では、4個の埋納・埋設土器のうち、1個が深鉢土器であり、深鉢形土器が埋納された点は特に注目された。3個の壺形土器の文様は、柁ノ原式土器（塞ノ神A a式土器）にみられる沈線文と微隆起線文をそれぞれ単独に抽出し、2個が沈線文を、1個が微隆起線文を口縁部から肩部へ施文したものである。沈線文を巡らす壺は3本を1セットとする沈線文を少なくとも6段巡らし、それぞれのセットを曲線文で結んでいるタイプである。微隆起線文を巡らす壺は、口縁部が円形を呈するものの、胴部は楕円形となり大きく外側に張り出している。そのため、底部も円形でなく小判形を呈している。微隆起線文は螺旋状ではなく、3本、4本、5本をセットとして環状に巡らしている。胴部は無文である³⁾。

（2）宮崎県の出土例

宮崎県の壺形土器の出土分布は、これまでの発見では大淀川以南の宮崎県南部地域に限られている。

柁ノ元遺跡の縄文時代早期の土器は、吉田式・前平式土器を主体として押型文土器・手向山式土器・平袴式土器・撚糸文土器などが出土し、I～XIII類に分類されている（田野町教委1986）。

そのなかで、壺形土器に該当するものはX類であり、「撚糸文を施文する壺形土器」として他の土器型式とは区分して扱っている。器形は、頸部から口縁部へは内傾し、口縁部はそのまま直上気味におわる。この土器についての詳しい説明はみられないが、出土分布図をみると5片の出土（同一個体？）がみられ、近辺からはI-c類（口縁部が肥厚し、口唇部は内傾する。外面に山形押型文土器を縦位に施文。）とXIII-c類（頸部は無文。肥厚部に幾何学的凹線文。）が出土している。

都城市荒ヶ田の土砂採取場から小学生によって採集されたものが下藺遺跡例で、手向山式期に属することが報告されている。高さ47cm、胴最大直径30cm、口縁部径9.3cmを測る壺形土器で、底部付近は若干不明であるがこれまでのところ最大の器体を呈する土器である。口頸部から肩部に

かけては沈線文が施文され、それ以下の胴部には山形押型文が施されるものである。器形は山江村出土に類似するもので押型文系土器の手向山式土器期に属する壺形土器では最も古い時期に位置づけることができる（都城市教委1989、同市教委1992）。

漆野原遺跡の壺形土器は、大正6年以前に発見され、宮崎神宮に奉納後、県立博物館設立後同館に寄託されたものである。同館では「弥生時代の壺形土器」として収蔵されていたが、最近岩永哲夫によって詳細な検討が行われ、縄文時代の壺形土器であることが判明した。壺形土器は、器高28.6cm、口径6.2cm、胴部最大径20.2cmの全くの完形土器である。文様は口縁部から肩部にかけて施文され、肩部以下は無文である。文様の組み合わせは、刺突のある突帯、刺突文、沈線文、波状文からなる。丸い刺突を施した突帯は口縁下、頸部の中央及び下位にそれぞれ横位に1条張り付け、文様帯を上下に二分割し、更に、4箇所の口縁部の波頂部から縦位に2～3条貼り付けることによって文様帯全体を八分割している。八分割した文様帯には沈線文、刺突文を全面に配し、二分割した上下の文様は対称的な雰囲気をもつ構成をなし、美的に調和している。このような文様の組み合わせは鹿児島県前畑遺跡に類似例があり、文様の特徴から平袴式土器の壺形土器とすることができる（岩永1991）。

このように、縄文土器で全くの完形で採集されることは珍しく、完形のまま埋められていた可能性が非常に高い。

（3）熊本県の出土例

熊本県の壺形土器の出土分布は、これまでの発見では人吉盆地内に限られている。ただ、熊本県中央部の瀬田裏遺跡の押型文土器期にもあるが、南九州の壺形土器の形態とは異なるため、分布域からは除外した。

高城遺跡は、縄文時代早期の土器は押型文系土器（山形文・楕円文）、手向山式土器、塞ノ神式土器などの各型式が報告されている。そのなかで「一略一尚、土器においては壺型を呈するもので手向山式土器系かと思われる。」と記述されている。口縁部内面の上部と外面に山形押型文（菱形文か）を施文しているもの、口縁部外面に菱形押型文（報告書では山形の向かい合わせ施文で菱形の文様との表現）を施文し、その下部には山形押型文を施すもの、外面に横方向に押し引きよる沈線文を施文するものなどである（熊本教委1988）。

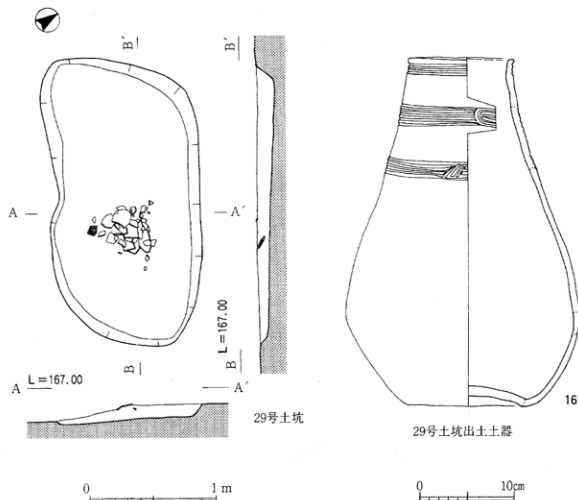
城・馬場遺跡は、縄文時代早期の土器は、円筒形土器が1個体出土した以外は手向山式土器と壺形土器だけの出土である。円筒土器を除けば手向山式期の良好な単純遺跡である。

外面に山形文押型文を施文し、内面には間延びをした山形押型文を施すものや、外面に櫛引き（篋か？）による凹線文を施文するもの、外面に網目撚糸文を施文し口唇部に山形押型文を施すもの、外面、口唇部、内面に山形押型文

を施文するものがある。外面に山形押形文の地文の上から櫛（篲か?）による凹線文を重ねて施文するもの、外面には丸みを帯びた山形押形文が施文され、口縁部上部に凸帯気味の張り出しが作られ、そこから口唇部の内面にかけて角の付いた山形文が施されるものなどがある。また、外面は無文（外反が強いためか）で、口唇部と内面に山形押形文が施文されるもので、口縁部を少し欠くが、頸部、胴部、底部の壺形土器の器形が唯一判明するものがある。そのほかに、外面全体に菱形文を施文するが、最下部の底部側面は施文されないものもある（熊県教委 1990）。

天道ヶ尾遺跡は、早期の遺物が最も多く、押型土器期、手向山式土器期、平椀式土器期、塞ノ神式土器期のものがみられる。その中で壺形土器として35点が提示されている。

山形押型土器は、外面は縦位に施文し、口縁部内面は横位に施文する。「く」字に外反する口縁部外面に横位の沈線文を施文し、それ以下には縦位の撚糸文を施文するものもある。外面にはヘラ描きの曲線文を施文し、口唇部には短沈線（刻目）を施すものもある。頸部外面に綾杉状の凹



第4図 灰塚遺跡の壺形土器出土状態
【原図＝熊本県教委2000より】

線文を施文するものや頸部外面に櫛状施文具による浅い曲線文を施文するものもある。口縁部は直行気味であり、外面に地文として縦位の山形押型文を施文し、口唇端部と頸部に斜位に刺突文を施した凸帯文を3条巡らすものもある。口縁部は若干「く」字に屈曲し、外面に地文として縄文（RL）を施し、口縁外面には斜位に刺突文を施した凸帯文を4条巡らすものもある。口縁部が僅かに外反し、地文には撚糸文を施文し、斜位に刺突文を施した凸帯文を4条巡らすものや凸帯文間、撚糸文の上から鋸歯状のヘラ描き沈線文を施文するものもある。口唇平坦部に半截竹管文による三日月型の刺突文を巡らすものや、口縁部が外反した外面に斜位に刺突文を施した凸帯文を3条巡らすものなどがある（熊県教委 1990）。

瀬田裏遺跡は、ゴルフ場建設のため大津町教育委員会が昭和63年5月から緊急調査を実施した縄文時代早期の押型土器期の大遺跡である。壺形土器は、高さ約26cm、最大胴部23cmの大きさで、胴腹部に径約8mmの穴が一個開くタイプのものである。これまでのところ、形状や大きさがほぼ同じのもので、いずれも胴腹部に注ぎ口状の穿孔が存在する三個の壺形土器が出土している。器面には、全面に押型文が施文上されている。ここでは、南九州の壺形土器と形態が異なることから、ここで取り扱う南九州の壺形土器からは除外して考えた。

灰塚遺跡では、壺形土器の特徴がみられるものが484点出土している。また、35基の土坑中、27号、28号、29号、34号の4基の土坑から壺形土器が出土している。特に、29号土坑から出土の壺形土器は完形に近い資料で、遺構中央部ではほぼ床面直上での出土である。鹿児島県上野原遺跡や城ヶ尾遺跡とは異なり、楕円形の一周り大きな土坑の中央寄りからの壺形土器の一括出土であり、土坑に埋められた壺形土器として、興味ある出土状態を示している（熊県教委 1990）。

（4）長崎県の出土例

長崎県の壺形土器は、有明海に面した熊本県寄りの島原半島の百花台遺跡の1遺跡であるが、これ以南の地域でも今後発見される可能性は高い。

百花台遺跡では、在地の資料中に塞ノ神式土器の壺形土器片が2片出土していることが報告されている。いずれも肩部付近の破片で、4本単位の刻目をもつ微隆起線を貼付するタイプである。筆者が椀ノ原式土器と呼ぶ深鉢形土器にみられる微隆起線文と同一であり、この段階の時期に該当する。今のところ北西限の分布を示す資料である（古門 1990）。


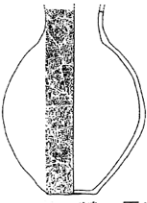
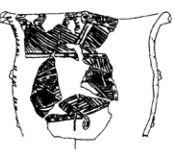


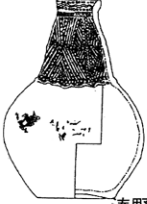
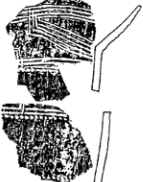
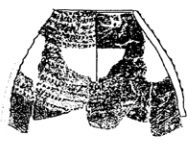
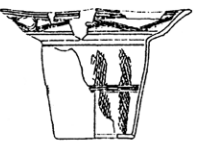

3 壺形土器出現の時期と変遷

縄文時代早期に該当する壺形土器の出土例の主な遺跡を紹介したが、早期後半の手向山式土器期から椀ノ原遺跡期の数型式に壺形土器が伴出することが判明した。これらの壺形土器は、個々の形態を比較するとバリエーションが若干みられるようである。

ここでは、型式学的序列に従って、押型文期以降にみられる壺形土器の形態上の特徴を抽出して検討し、その変遷を追ってみたい。

先に11遺跡の出土例を分析し、壺形土器の存在する土器型式を3期に分け、Stage 1からStage 3への移行を示した。さらに、口縁部を中心にA、Bの2種類の器形が存在することを明らかにした（新東1991）。Stage 1は手向山式土器、Stage 2は平椀式土器、Stage 3が椀ノ原式土器であり、Stage 1からStage 3への移行を想定した。

その後の土器編年上の新型式土器の発見と壺形土器の追加例をみると、手向山式土器と平椀式土器の間に天道ヶ尾

	深鉢形土器	壺形土器
手向山遺跡 ↓	 西ノ平遺跡	 城・馬場遺跡
天道ヶ尾式土器 ↓	 上野原遺跡	 上野原遺跡
平栴式土器 ↓	 石峰遺跡	 湊野原遺跡
石坂上式土器 ↓	 石坂上遺跡	 下田遺跡
栴ノ原式土器 ↓	 前畑遺跡	 塚ノ越遺跡

第5図 壺形土器の変遷

式土器（妙見式土器を含む）の1 Stageを設定することができる。さらに平栴式土器と栴ノ原式土器（塞ノ神A式土器）の間に石坂上式土器⁴⁾の1 Stageを設定することができる。今後の資料の増加に伴って、さらに細分が進むことが考えられるが、南九州の壺形土器の伴出型式は今のところ5段階を想定している（第5図）。

まず、押型文土器期は、これまで瀬田裏遺跡で出土している。瀬田裏遺跡例は、器形はまさに壺形土器に該当しており、押型文土器期には既に壺形の器形は存在していたことを窺い知ることができる。しかし、瀬田裏遺跡例では胴部に意図的に穿孔が施され、特殊に製作された土器の感も

否めない。そのため、ここでは南九州の壺形土器からは除外して考えたい。なお、天道ヶ尾遺跡例で、報告者は手向山式土器期の壺形土器に比定しているが、山形押型文の形態から押型文土器期に属することも考えられる。さらに、細片のため胴部の形態は不明であるが、くびれ部の頸部の復元内径は約15cmと壺形土器と認定するには口縁部が広いタイプである。

手向山式土器期の壺形土器は最初に認識されたものであり、出土例も最も多い。特に、城・馬場遺跡例は、口縁部は若干欠くもののほぼ全形を知り得る好資料といえる。器形は、口縁部を中心に数タイプに分かれる。まず、肩部に繋ぎの稜をつくり頸部は内傾して細まるが、頸部径は比較的広いものである。口縁端部は、僅かに外反する。同様な器形を呈するが、口縁端部は外反せず、頸部の細まった部分を僅かに直上したまま納めるものもある。頸部は筒状に細く立ち上がり、胴部は卵形の器形を呈するものがある（城馬場タイプ）。口径は5cm～6cm程度の細い筒形で、口縁部は僅かに外反気味のものである。筒状に細まった形でそのままおさめるものもある。

このようにStage1の手向山式土器期は、壺形土器の口縁部器形の形態の種類は多彩である。この現象は、手向山式土器自身の文様の組み合わせ等が多彩であることや遺跡発見数が多いことも考慮しなければならない。手向山式土器期の場合、壺形土器は、細口で直行した筒状の口縁部のタイプ（A）と広口の口縁部のタイプ（B）に分けられる。Aの場合、口縁部には突帯文や凹線文など手向山式土器特有の文様を口縁部に使用し、胴部とは文様で分離している。Bは、これまでの出土例では、網目捺糸文や山形押型文などで口縁部から胴部まで同一の文様を施文している。なお、内傾した無頸壺様の口縁部形態がみられるが、この形態がBとして定着することも考えられる。

天道ヶ尾式土器の壺形土器は、口縁部に三角形の刻目突帯文を数条巡らすタイプがある。刻目突帯文を巡らすものには、口縁部が筒状に直行して口径が広いものと狭いものがあり、口縁部は若干外反する。頸部文様帯から胴部文様帯の波頂部直下に瘤状突起と縦位方向の突帯の貼付がみられるが、これは大きな特徴としてあげられる。地文には縄文及び捺糸文がそれぞれ施文されており、刻目突帯文を巡らせるタイプは手向山式土器特有の地文が使用されている。特に、地文の捺糸文の上から凹線文で鋸歯状文を描いているが、後続する平栴式土器との関係で興味深い。

このようにStage2の天道ヶ尾式土器の壺形土器は、口縁部が外反する器形と頸部から口縁部が直行する長頸壺の器形を呈するものがあり、施文上では特に、瘤状の突起が数多く貼付されるのが大きな特徴といえる。

平栴式土器期の壺形土器は、以前は前畑遺跡だけの出土であったが、その後上野原遺跡など多くの遺跡で発見され

壺形土器の最も華麗な完成された時期とみることができ。平椀式土器の壺形土器は、有文と無文に分かれ、器形上はほぼ統一された形態がみられる。前畑遺跡でみる限り、有文の場合は口縁上端部に粘土帯を輪積み状に貼付して蒲鉾状の肥厚帯をつくるものであり、無文のものは有文と同様の肥厚帯をつくるものと肥厚帯をつくらずそのまま丸みをもって納めるものがある。器形は、細片のため断定は避けたいが、二通りの口縁部器形が確認できる。肩部と頸部の接合部から口縁部へは直上して筒状の口縁部をつくるタイプと頸部から口縁部は直線的に内傾したままでおさめる無頸壺のタイプである。

このようにStage 3の平椀式期は、上野原遺跡など多くの遺跡で発見されている。口縁部は蒲鉾状の肥厚部分をもつ独特の器形であり、平椀式期の特徴の一つと考えられる。なお、この期の壺形土器には無文土器も確認され、今後、壺形土器の用途を考える上においては非常に重要な要素と考えられる。

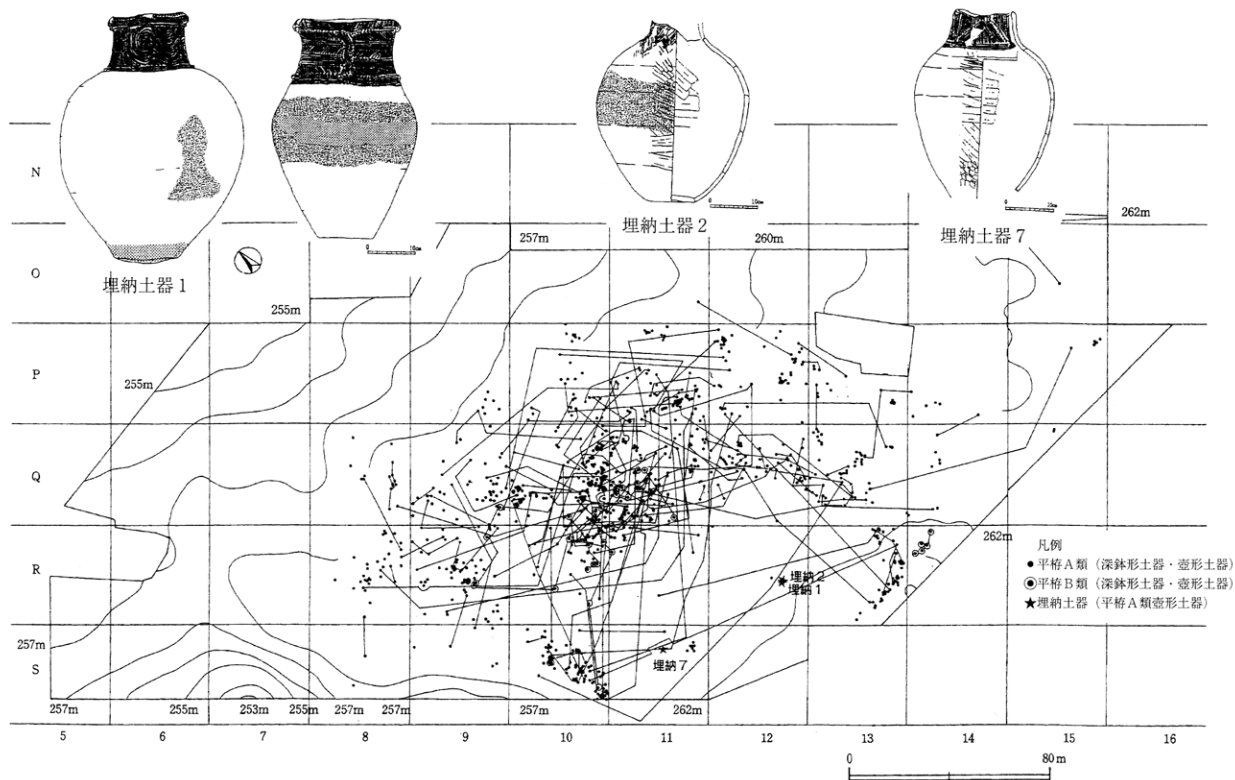
石坂上式土器は、口縁部はほぼ先行する平椀式土器に類似するが、胴部文様は後続の椀ノ原式土器に類似する。口縁部文様は、凹線文で直線や曲線を描く。胴部文様は、幅2cm程度の縦位の撚糸文を4～5本を束にした撚糸文帯と無文帯を交互に施文する。そして、この文様帯の上から

3～6条の凹線文を横位に巡らせるが、途中で渦文や菱形文を描くのが大きな特徴である。志布志町下田遺跡で石坂上式土器の壺形土器が伴っているが無頸壺で、頸部には刻目を付けて幅広の突帯文を巡らせる。椀ノ原式土器の微隆起突帯文の粗形的な観がある。

このようにStage 4の石坂上式土器は、下田遺跡の1例ではあるが、深鉢形土器の特徴の違いから類別できるものであり、今後の資料の増加が期待される。

椀ノ原式土器期の壺形土器は、別府（石踊）遺跡と塚ノ越遺跡で知られていたが、城ヶ尾遺跡や灰塚遺跡などでは埋納壺（埋設壺）も発見されている。また、西北限で最も遠隔地の長崎県百花台遺跡でも出土し、後続の土器型式も含め最も注目される段階である。この期の壺形土器の文様は、刻目を有する微隆起突帯文を巡らすものと1条から2条の凹線文を巡らすものがある。いずれも椀ノ原式土器特有の文様を使用しており、この型式に属する壺形土器と考えられる。器形は、口縁端部が外方に拡張して平坦な口唇部面をつくり頸部から口縁部へ内傾したままでおさめる無頸壺のタイプがある。

このようにStage 5の椀ノ原式期は、AとBの二つのタイプにはほぼ分離される。Aの場合は口縁端部の細かな形態の違いは若干みられるが、Bの場合はほぼ定まった無頸壺様



第6図 上野原遺跡の平椀A・B類土器の壺形土器等出土配置図 [原図=鹿埋分セ2001より]

の器形となる。

以上、縄文早期後半の各型式にみられる壺形土器について、その特徴を検討した。第5図は、土器型式の段階ごとにみられる壺形土器の変遷図である。

このように壺形土器は Stage 1 の手向山式土器期から Stage 2～4 を経て Stage 5 の柀ノ原式土器期へと段階的に継承されるが、Stage 1 の段階から壺形土器の器形には長頸壺=Aと無頸壺=Bの二通りの器形が確立しているようである。なお、南九州で壺形土器を伴出する平柀様式については、土器の型式組成や編年上の問題など今後の資料の増加に伴って定期的に検討する必要がある。

4 壺形土器の用途と埋納及び埋設の意義について

壺形土器の用途と埋納及び埋設の行為は、相互に関連はあるが、意義については大きく異なることが考えられる。それぞれについて検討してみたい。

(1) 壺形土器の用途について

アカホヤ火山灰の発見以来、これを示準層として南九州の土器型式の変遷がほぼ確立されるに至った。その結果、土器型式の形態は、火山灰層の上・下で大きく異なることも判明した。つまり、アカホヤ火山灰の降灰以前の縄文時代早期には南九州の在来系土器の大きな発達を確認され、降灰以後の前期以降には甕式土器や曾畑式土器など広域な土器型式の南九州への進出がみられる。

このような土器文化の画期的な変化がアカホヤ火山灰層によって明瞭に生じたわけであるが、土器文化の推移から南九州の特異性を引き出すことも可能となった。例えば、早期の段階の南九州と北部九州の石器組成の相違も重要な問題であろう(米倉1984)。こうした南九州の特異性(あるいは独自性)は、縄文文化の地域性として単純に片づけられるものではなく、縄文文化にもっともかかわりの深い自然環境(植生)の変遷が大きく関与していることが考えられる。アカホヤ火山灰の降灰の時期は西日本に照葉樹林が定着した時期であり、考古学上では縄文時代早期と前期の境界と一致する。福井県鳥浜貝塚の調査成果に代表されるように、西日本では縄文前期に照葉樹林の定着にともなう縄文文化の飛躍的な発展が証明された(安田1980)。南九州では、鹿児島県曾於郡志布志町東黒土田遺跡で縄文草創期の貯蔵穴から落葉広葉樹の大量の堅果類が発見されたが(河口1982)、始良郡栗野町花ノ木遺跡では早期後半の貯蔵穴からイチイガシが出土し(鹿県教1976)、すでに南九州では早期の段階で照葉樹林の実を食料としたことが裏付けられている。このような自然環境の中から南九州は、独自の文化を飛躍的に発展させたことが想定される。植物質加工石器の出土量の高い傾向がみられる南九州は、照葉樹林の環境下において、植物質食料への依存度が高かったことを示唆している。

これらの環境の中から、必然的に壺形土器の器種が形成

されていったことが想定される。もちろん壺形土器は、貯蔵の用途が考えられ、木の実の貯蔵のほか種子類の保存が考えられる。これまでのところ壺形土器は南九州地域以外にはみられない器種である。南九州の壺形土器の出土する遺跡からは煮沸用の深鉢形土器が比較的多量に出土しており、壺形土器は深鉢形土器とセットとして存在していることが伺える。福永裕暁は、壺形土器が分布する南九州地域の石器組成に着目し検討を行っている。その結果、磨石・敲石類や石皿などの植物質食料調理具の比重が石鏃などの狩猟具より大きく、定住生活を営む狩猟採集民の生業に必要な石器が出揃ったことを示した(福永1995)。

このように、壺形土器という新たな器種の出現は、他の地域と異なった社会的環境の成立が考えられる。壺形土器を必要とする縄文社会がいかなるものか興味深いものがある。根拠となる資料は少ないが、壺形土器という器形から種子類や製粉の保存等を想定すると、すでに南九州地域においては植物栽培などの原始的な縄文農耕が行われていた可能性が考えられる。

(2) 埋納及び埋設について

これまで埋められているため「埋納壺」と容易に「埋納」の用語を使用する傾向にあったが、土坑等に埋められた土器には、その行為によって「埋納」か「埋設」かの用語は厳密に選択する必要がある。

「埋納」とは、物が人の目に触れないように完全に覆い隠してしまうことである。そして、再び取り出すと、その物は元の機能に戻すことができる。石斧などを地中に一時保管した埋納遺構(デポ)などがその例である。

一方、「埋設」とは、その物がある目的をもって埋めて使用することであり、本来違う目的に使用される物である。埋甕や土器埋設炉などがその例である。

南九州の壺形土器の使用と埋納及び埋設の行為は、それぞれ関連はあるが、異なる行為である。つまり、日常使用する壺形土器と、祭祀的な儀礼を行うために使用した壺形土器では、精神的なものであれ違う用途に使われたものであり、同じ形のものでも使用目的が異なることになる。そのことから、土坑に埋められた壺形土器は、「埋設壺」と呼ぶのが妥当と考えられる。

(3) 壺形土器の埋設の意義について

今のところ埋設された壺形土器は、上野原遺跡(第2・6図)、城ヶ尾遺跡(第3図)、灰塚遺跡(第4図)の3遺跡で確認されている。各遺跡とも埋設された個体数はそれぞれ違うが、完形の壺形土器が土坑内に丁寧に埋められた行為は3遺跡とも同じである。

上野原遺跡例は、自然科学分析の結果から、これらの土器は「棺」・「再埋葬」でも「貯蔵具」でもないとしている。そして、土器の中にはススの付着が観察されるものがあることから、土坑内に埋める前に二次加熱つまり火で焚いた行為があったことを想定している。そして、土坑に埋めて

いるが、土器の大きさに合う土坑から「土器を何度も出し入れするために一時的に納めておく土坑」と、性格付けを行っている（八木澤2000）。

しかし、上野原遺跡の壺形土器の埋められている場所は、遺跡の中では高所の最良の選地であり、土器を火で焚く祭祀的儀礼の後、その土器を地中に奉納する祭祀を行った場合は別の考え方になる。上野原遺跡では、11基12個体の壺形土器が、天道ヶ尾式土器期に5個体、次の平椀A・B式土器期に3基4個体、平椀C式土器期に3個体の3時期に埋める行為が継続的にあったことを示している。そのことは、前段階の儀礼的行為を尊重したものであり、二度と土器は取り出すものではないことを示唆していると考えられる。

このことから、壺形土器は祭祀的儀礼の行為で火で焚かれ、祭祀的儀礼の行為で完全に埋められたことが考えられる。このようなことから3遺跡の埋められた壺形土器を観察すると、壺形土器は精神的な祭祀的行為で埋められたものであり、地中に「埋設」されたものと考えている。

5 おわりに

最近の発掘調査の縄文時代草創期から早期の成果をみると、日本列島の最南端の南九州には上野原遺跡のような独特で先進的な様相をもつ縄文文化が最初に登場したといっても過言ではない状況にある。そして、これまでの日本の縄文文化観の枠組みでは理解できない縄文文化が存在しているようである。ここで取り扱った壺形土器の出現と埋設壺形土器の存在もその一つである。今後は、あらゆる角度から縄文時代早期頃の南九州の特異性を抽出し、一つ一つ深く追求する作業を行い、南九州の縄文文化の解明に迫りたい。

【 註 】

- 1 椀ノ原式土器は、塞ノ神式土器を再考した段階で設定した型式名である（新東1989）。これまでの塞ノ神式土器を二系統に分離し、貝殻文系の塞ノ神様式に三代寺式→塞ノ神式→鍋谷式土器をおき、燃糸文系の平椀様式に平椀式土器→石坂上式→椀ノ原式土器を位置付けたものである。椀ノ原式土器は河口貞徳の塞ノ神A式土器に該当する。
- 2 埋納と埋設は厳密に意味が異なり、精神的な行為によっても区別されなければならない。
- 3 城ヶ尾遺跡は現在鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書作成中のため、これまで発表された資料で検討した。
- 4 石坂上式土器は、註1の燃糸文系の平椀様式に該当する。

【参考文献】

- 河口 貞徳 1972「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第6号
鹿児島県教育委員会 1976「花ノ木遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（1）
安田 喜憲 1980『環境考古学事始』日本放送出版協会
河口 貞徳 1982「縄文草創期の貯蔵穴」『季刊考古学』創刊号
米倉 秀紀 1984「縄文時代早期の生業と集団行動」『文学部論叢』

第3号

- 新東 晃一 1989「塞ノ神・平椀式土器様式」『縄文土器大観』草創期・早期・前期 I 小学館
松舟 博満 1990「手向山式土器の壺について」『肥後考古』第7号
新東 晃一 1990「縄文早期の壺形土器」『南九州縄文通信』No.4
福永 裕暁 1995「石器組成からみた南九州縄文早期後半の壺形土器出土遺跡」『古文化論叢』第34集
児玉健一郎 1998「城ヶ尾遺跡の塞ノ神式土器」『鹿児島県考古学海研究発表資料—平成10年度秋季大会—』
八木澤一郎 2000「上野原遺跡10地点（3）土器埋納遺構 小結」『鹿児島立埋文センター発掘調査報告書』（27）

出土地名表引用文献

- 【鹿児島県関係】
- 1 鹿児島県教育委員会 1980「石峰遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（12）
 - 2 鹿児島県教育委員会 1981「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（15）
 - 3 鹿児島立埋文センター 1993「星塚遺跡」『鹿児島立埋文センター発掘調査報告書』（7）
 - 4 鹿児島県教育委員会 1990「前畑遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（52）
 - 5 鹿児島立埋文センター 1993「飯盛ヶ丘遺跡」『鹿児島立埋文センター発掘調査報告書』（3）
 - 6 鹿児島立埋文センター 1993「榎崎B遺跡」『鹿児島立埋文センター発掘調査報告書』（4）
 - 7 志布志町教育委員会 1979「別府（石踊）遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』（2）
 - 8 志布志町教育委員会 1992「下田遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』（22）
 - 9 河口貞徳 1972「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第6号 鹿児島県考古学会
 - 10 鹿児島立埋文センター 2000「上野原遺跡10地点」『鹿児島立埋文センター発掘調査報告書』（27）
 - 11 鹿児島立埋文センター 2001「上野原遺跡10地点」『鹿児島立埋文センター発掘調査報告書』（28）
 - 12 鹿児島立埋文センター 2002「上野原遺跡2・3地点」『鹿児島立埋文センター発掘調査報告書』（41）
 - 13 児玉健一郎 1998「城ヶ尾遺跡の塞ノ神式土器」『鹿児島県考古学会研究発表資料—平成10年度秋季大会—』
 - 14 鹿児島立埋文センター 2001「横井竹ノ山遺跡」『鹿児島立埋文センター発掘調査報告書』（43）
 - 15 河口貞徳 1989「型式不明の土器」『知覧文化』第26号
 - 16 吹上町教育委員会 1990「塚ノ越遺跡他」『吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書』（4）
 - 17 樋脇町教育委員会 1999「小市原遺跡」『樋脇町埋蔵文化財発掘調査報告書』（2）
 - 18 鹿児島立埋文センター 2002「出水平遺跡」『鹿児島立埋文センター発掘調査報告書』（28）
 - 19 吉松町教育委員会 1999「石打・七ツ谷遺跡」『吉松町埋蔵文化財発掘調査報告書』（4）
 - 20 松山町教育委員会 1990「香ノ田遺跡」『松山町埋蔵文化財発掘調査報告書』（5）
 - 21 未発表資料。現在整理中であり、平椀式土器に該当する。

【宮崎県関係】

- 22 宮崎県教育委員会 1997「天神河内第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集
- 23 宮崎県教育委員会 2000「白ヶ野第3遺跡B地区」『宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書』第25集
- 24 宮崎県教育委員会 2002「白ヶ野第2・第3遺跡」『宮崎県埋蔵

- 25 宮崎県教育委員会 2001 文化財発掘調査報告書』第52集
「杉木原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書』第33集
- 26 宮崎県教育委員会 1994 「妙見遺跡」『宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集
- 27 都城市教育委員会 1989 「下園遺跡・都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内北東部）」『都城市文化財報告書』第8集
- 28 都城市教育委員会 1992 「屏風谷第1遺跡」『都城市文第17集
- 29 串間市教育委員会 1995 「開尾遺跡」『串間市埋蔵文化財発掘調査報告書』（12）
- 30 田野町教育委員会 1986 「札ノ元遺跡他」『田野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第3集
- 31 田野町教育委員会 2001 「元野河内遺跡」『田野町文化財調査報告書』第39集
- 32 野尻町教育委員会 1990 「新村遺跡・高山遺跡・東城原第1・第2・第3遺跡・紙屋城址遺跡」『野尻町文化財調査報告書』第4集
- 33 高岡町教育委員会 1996 「橋山第1遺跡」『高岡町埋蔵文化財発掘調査報告書』第9集
- 34 岩永哲夫 1992 「壺形縄文土器の一例」『宮崎考古 石川恒太郎先生追悼論文集』p7～15

【熊本県関係】

- 35 熊本県教育委員会 1988 「高城遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第95集
- 36 熊本県教育委員会 1990 「城・馬場遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第110集
- 37 熊本県教育委員会 1990 「天道ヶ尾遺跡（Ⅱ）」熊本県文化財調査報告書』第111集
- 38 熊本県教育委員会 2000 「灰塚遺跡（Ⅰ）」『熊本県文化財調査報告書』第187集

【長崎県関係】

- 39 古門雅高 1999 「発見！塞ノ神式の壺形土器」『西海ニュース』第10号 p7～8